

# 社会科学入門における高大連携授業の展開

## — 地域を軸とした学びを通して —

多賀 秀徳（三重県立飯南高等学校）

### 1. はじめに

平成 30 年度から学習指導要領が改訂され、小中学校では新たな教育課程に基づいた学びが進められている。高等学校では、令和 4 年度入学生から年次進行で新学習指導要領に基づいた教育課程が実施され、学力の 3 要素や資質・能力等を育むこととなる。今後高校現場では、新科目や総合的な探究の時間の実施など、新たな学びを展開していくこととなる。またこの改訂の流れとともに、高大接続改革や大学入学者選抜改革も行われ、進路指導が大きく変化する状況にある。

このような中、今年度も高大連携に関するフォーラムや研究会等が開催され、「高大連携」は関心が高まっているテーマの一つであると言える（注 1）。例えば直近の『キャリアガイダンス』439（2021 年 10 月）では、高大連携の特集が組まれてその具体的な取組や受講生徒の声が紙面を飾り、全国各地の高校で大学との連携授業や高校生への直接的な学びの支援が行われていることが共有されている。また、総合的な探究の時間や〇〇探究という新科目の設置により、探究をどのように進めていくのか、将来に繋げていくのか交流する研修も数多く行われている（注 2）。高校での学びを進め、大学の研究へと有機的に接続・設計できれば、生徒の学ぶ意欲をそのまま将来へと結びつけることができるであろう。そのような高校・大学での協働的な支援・伴走は、今後の高校教育のあり方を考える上で大切な視点であると考えられる。

筆者が在籍する三重県立飯南高等学校では、平成 12 年度より地元大学との連携授業を行ってきた（注 3）。中でも学校設定科目「社会科学入門」では、大学教員とのリレー形式での授業を進め、生徒の学びを高めてきた実績がある。本稿ではこの社会科学入門の学びに焦点を当て、地域を軸とした高大連携授業のあり方について論じていきたい。そのため、まずは社会科学入門の概要を紹介し、その授業計画や本校の取組と接続した学びについて述べていくこととする。

### 2. これまでの社会科学入門の成果と課題

#### （1）三重県立飯南高等学校の概要

三重県立飯南高等学校は、松阪市の山間部に所在する 1 学年 80 名定員の小規模校である。そして、平成 11 年度には全国初の「連携型中高一貫教育校」となり、同時に普通科から総合学科に改編した学校である。近年の卒業後の進路は就職 7 割、進学

3割ほどであり、進学先は短期大学や専門学校が多数を占めている。

本校の中高連携は科目間連携や教員交流等を通じて、飯南・飯高両地域の3中学校（現在は統合により2中学校）との6年間の学びを通して生徒一人ひとりの興味・関心を育て個性を伸ばす教育を行っている（注4）。そして総合学科として、郷土・環境系列、介護福祉系列、総合進学系列（開設当初は国際コミュニケーション系列）、コンピュータ系列の4系列を設置し、2年次より系列に分かれて学びを進めている。各系列の専門科目とともに、総合学科の特性を活かしたバリエーション豊かな選択科目を設置し、中高一貫教育の趣旨を大学との接続にも活かすため、改編当初から高大連携にも取り組んできたところである。また現在は、令和元年度より文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の採択を受け、「地域課題解決型キャリア教育」を推進している（注5）。

## （2）社会科学入門の概要

学校設定科目「社会科学入門」は教科公民に位置付けられ、平成12年度から国際コミュニケーション系列群の2年次選択科目（2単位）として開設された（注6）。当初は大学進学希望者に履修を勧めてきたが、現在は総合進学系列（平成21年度より国際コミュニケーション系列から名称変更）の必修科目として設置されている。実施形態は大学教員と高校教員によるティームティーチングとし、高校教員は大学側との連携や引率業務を担当するため2名運営とした。授業目標は、「行政学、看護学、教育学、経済学等の各分野を先進的に研究・実践されている教員を講師として招請し、各専門分野の講義・演習を通して、学問に対するより高い興味・関心を育み、社会科学を中心とする学問の基礎的素養をやしなう。また資料、参考文献の集め方やレポートの書き方、発表方法等を学習し、将来大学への進学を希望する場合に、より豊かな歩みを踏み出せる能力を身につける」である。

開設当初は松阪大学の協力を得て、大学教員によるリレー方式の高大連携授業を開始し、単なる出前授業ではなく一年間継続した講義を行ってきた。また、年に1回大学でのゼミ授業体験や研究室、図書館等の大学施設見学をスクーリングとして実施してきた。初年度（平成12年度）の大学教員による講義内容は、ミクロ経済学（公共財と社会資本）、マクロ経済学（比較優位と分業の利益）、政治学（政治学入門）、地域社会学（まちづくり入門）、家族社会学（社会調査の方法）の5分野（5名）であり、内容は大学生対象のものと変わりはなく、講義や演習、ディベート等を実施した。講義分野は担当する大学教員によってバリエーション豊かで、年度によって法学や経済学、心理学、言語学など様々である。日程は各分野1日2時間×3回程度とし、大学側の講義時間が年間30時間確保された（スクーリングを含む）。

高校教員は、大学教員の講義前後に補充授業や課題レポート作成を担当し、作成し

たレポートについては大学教員の採点を受け、次週の講義資料として活用されることもある。課題レポートはA4プリント1枚以上であり、大学教員から出された課題について授業内容に基づいて約1500字程度を書き上げることは、高校生にとって貴重な体験である。授業当初は書くのに一苦労であるが、回を重ねるごとに構成や内容も上達し、プリント3枚を越える生徒も出てくる。また年度末には平成14年度から学習レポート発表会が行われ、平成18年度以降は生徒自らが授業内容に関連した課題を設定して大学で研究発表会を行うこととなった。この発表会には当時学長も出席し、地元テレビ局の取材も入るなど大きな行事となっていた。

松阪大学から校名が三重中京大学となっても、平成17年度に本校と三重中京大学との間で連携授業として協定が結ばれ、「高等学校と大学との教育内容の理解を深め、高校生自らの進路決定への意欲的な取り組みを促進し、地域の教育力の向上」を目的として実施を継続した。授業を受講する生徒は、現代法経学部現代法経学科の基礎教育科目「社会科学入門」の聴講生となり、高校で単位を習得すると大学入学後に単位認定できるものとした（注7）。

その後、三重中京大学が平成22年度入試から新規学生の募集を停止すると、協定は自然消滅することになり、この連携授業自体も開講の危機となった。ただし、本校の取組は関係する大学教員から高く評価され、何かしらの形で継続できる方向がないか協議されることとなった。連携大学の問題や講座をどうするのか、出前形式の授業になってしまわないか等の懸念が議論された。そして、平成25年度以降は当初の単位認定はできないものの、三重大学の教員を中心として連携授業を継続していくこととなった。高校－大学との連携授業から、高校教員－大学教員との連携授業へと方向転換し、これまでに三重大学（教育学部）や中京大学（総合政策学部）、三重県立看護大学（看護学部）の教員にも講義いただいている。

### （3）成果と課題

これまでの社会科学入門の取組内容は、校内の残存資料から平成19年度までの様子が窺い知れる（注8）。筆者は平成27年度より本校へ赴任し、今年度（令和3年度）でこの授業担当は7年目（当初2年間は副担当、その後5年間は主担当）を迎える。この授業を大きく開設期（平成12～21年度）、高大連携転換期（平成22～26年度）、筆者担当期（平成27～令和3年度）と3つに分類するとすれば、開設期は残存資料によって概ねカバーできる。そして筆者担当期も確認は可能であるが、高大連携転換期の部分を取りまとめた資料は存在しない。ただしこの時期は、先述したように単位認定を伴う高大連携授業としての要素がなくなり、高校教員－大学教員との連携授業へと転換していった時期であり、その内容自体は各担当教員とのリレー方式による授業であって、筆者赴任当初の内容とさほど大きくは変わらない。そこでここで

は、開設期と筆者担当初期（副担当だった平成 27～28 年度）を取り上げ、高大連携授業の成果と課題を浮き彫りにしたい。

#### ① a 開設期の成果

生徒の学問に関する興味・関心を育くみ社会科学の基礎的素養を養うことや、資料収集、分析調査、レポート作成、発表などの基礎を学ぶといった、教員が意図した事項は生徒の取り組み状況やレポート等から概ね達成された。そして自ら課題を設定してレポート作成することを継続した結果、論理的思考力や表現力を高めることにも繋がった。中にはその力や学びの意味・姿勢をアピールしながら、高倍率を突破して大学進学を果たす生徒も出てきた。このように、この授業を通してキャリア教育的な視点の学力も身に付き、自己の進路決定にも結びつくこととなった。

#### ① b 筆者担当初期の成果

大学教員の講義は必ずしもレジュメがあるわけではないため、授業当初は高校での学びとの相違に混乱する生徒はみられるが、次第に要点をしっかりとメモに取り、聞き漏らさないよう集中して授業に取り組むようになった。さらに、授業後にはほぼ毎回レポートが課されるため、レポート作成を通して書籍や新聞、インターネットを活用する機会は自ずと増え、活字に対する抵抗が減少していった。まとめる際には得られた知識を構成する力が格段に上達し、自分の意見を補強するために根拠を提示することができるようになった。また、大学の授業を先取りすることで進路選択上の大きな意味を持った。

#### ② a 開設期の課題

大学教員の授業は高校生のレベルに合わせて易化することを意図していないため、「難しい」、「普通の授業の方が楽だ」という生徒が少なからず存在した。基本的な学力が十分身に付いていない生徒もいるため、授業内容に対応できない場合もあった。ギャップに苦しむ生徒は多く、受講生全員が満足してこの授業を終えられた訳ではないため、今後の授業展開等を工夫する必要がある。

#### ② b 筆者担当初期の課題

各大学教員の授業は専門性が高く、その分野に特段関心がある生徒はまだしも、興味を見いだせない生徒からは「難しくて付いていけない」、「メモをするにも言葉がわからない」などの意見が多数出てきた。内容は行政学、経済学、教育学、看護学の各専門分野で長らく固定していたが、いずれも難しいと感じてしまう生徒が年々増加している。そのため、大学の講義内容という質的保障をしつつ、事後の補足説明や講義内容について精査する必要があるが出てきた。また、講義を聞きメモを取れるようにはなかったが、一方で講義内容に疑問を持ったり、自らの想いをぶついたりする生徒はあまり見られなかった。知識のシャワーを受けるあまり、それで満足してしまう様子がレポートの内容から見られるようになった。

① a , ① b により、各分野のレポートを通して、情報を収集したり自らの意見を表現したりする力が高まっていることが窺える。これは大学での学びにも繋がる部分であり、そのレポート内容については授業担当者の一人である村林守氏が著書でも紹介しているが、大学生と同等の講義内容であっても、高校生が思考を重ねながら内容を深められる授業であると言える（注9）。また、その学びを深める過程で大学進学という進路を切り拓くことにも繋がっており、キャリア形成上においても重要な授業であると考えられる。

しかし② a , ② b により、授業内容に付いていけない生徒がいるのも事実である。当初は大学との単位認定があったため、高校側も大学側も内容の質を下げないことを共通理解として実践することや、生徒の学習に対する意識付けもまだ容易であった。とは言え、その中でも当初からギャップに苦しむ生徒は多い。そして近年は、総合進学系列を選択したからといって最初から進学を強く希望する生徒はごく一部であることから、そもそも生徒が「なぜ大学のような授業を学ぶのか」と感じ、授業目的と生徒の意識とにズレが生じることとなっていた。このため、大学教員の講義で生徒は口だけ開いている状態になっていることもあり、学びの意欲を減退させている可能性がある。また、授業はリレー方式で運営しているものの、生徒からすれば各分野がそれぞれで独立したものと感じられてしまい、結果的に単発的な出前形式の授業と捉えてしまっている事実とも読み取れる。

以上から、社会科学入門は生徒の成長にとって大きく意味を持つ授業ではあるものの、開設当初から生徒は内容のギャップに苦しみ、工夫の余地をそのまま置き去りにしてしまっていた授業でもある。ただし、意図的に大学の学術的な壁を設定している事実もある。このため、これまで高校教員、大学教員、生徒三者が感じてきた高大連携の良さを残しながら、課題点を克服することが求められた。そこで近年は「地域を軸」とした授業展開として、自分軸と繋げられるような授業への転換をはかる取組を行ってきた。次項では地域を軸とした授業内容への変化や、その際に起こった影響について述べていきたい。

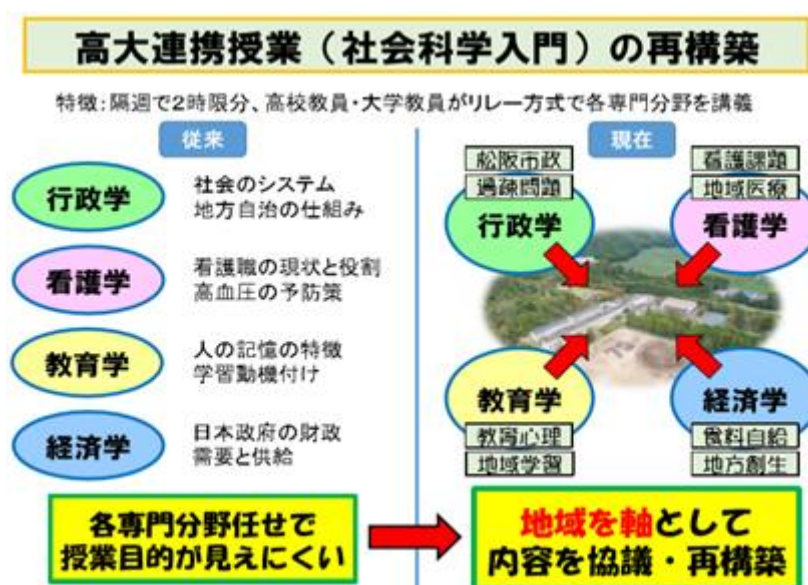
### 3. 「地域を軸」とした学びの構築

#### （1）高大連携授業の内容の変化

先述したように、本校は山間部に位置した小規模校であり、今後地域の小中学校の生徒数が減少することは確実な地域である。少子高齢化や過疎化が進む地域は一般的に負のイメージの方が強くなってしまいが、課題が山積する地域ということは、「学ぶ要素が多い地域」とも言い換えられる。ここから本校は「世界の課題最先端の地」として飯南・飯高地域を捉え直し、「地域課題解決型キャリア教育」に取り組む中で「地域を学び場」として、これからの社会で求められる力を付けようと考えた（注

10)。

近年の社会科学入門は、行政学、看護学、教育学、経済学の4分野を取り上げ、各大学教員の専門分野を中心に掘り下げた学びを提供している。ただ、大学の講義内容という質的保障はあるものの、一つひとつの分野を学んでいく意識が強くなってしまい、図らずも生徒に1つの科目で4つの別内容を学習するという感覚に陥らせてしまっていた。この反省を踏まえ、質的保障はしつつ、各専門分野に「地域」という軸を置き、学びに共通した視点を持たせることとした。現在、4分野は次の図のような形で再構築し、地域を軸とした講義内容とした（注11）。以下、近年の取組内容および令和3年度の実施内容を示したい。



### 行政学

担当教員が県政や松阪市政に長年携わっていたことから、行政の基本的なあり方や社会を支えるシステム、地方自治の理論的な内容を中心に経験を踏まえながら講義を行った。そして課題レポートでは、松阪市の行政サービス・仕事と松阪市総合政策とを関連付けて、松阪市は暮らしをどのように支えているのか、なぜ地方自治が重要なのかについて考えた。それらも踏まえて令和元年度からは、なぜ人口が減少していくのか地域データを示しながら考え、自分たちには何ができるのか思考していった。

4/27 「地域」とは何か 「地域」の人口が減るのはなぜか（講義形式）

5/25 政治の力で人口減少をくい止めることができるか（講義形式）

### 経済学

少子化や地域活性化をテーマにしたディベートの実施や、日本政府の財政についての講義、また主張の根拠に必要なデータを表計算ソフトで作成する活動等を行った。令和元年度からは食料自給問題や地域で行われている六次産業化、地域通貨など、実際に身近で取り組まれている経済的な内容について考え、他地域の事例と比較しながら

ら地方創生について考察を深めていった。

#### 6/8 地方創生と農業（講義形式）

6/22 農林水産業の高付加価値化（課題に基づく生徒発表）

ふるさと納税、情報発信、地域通貨の効果（講義形式）

### 看護学

総合進学系列を選択する生徒には看護師志望者が毎年一定数いることから、従来は看護職に関することや病気への関わり方、行動変容について焦点を当てていた。令和元年度からは内容がより身近になるように地域診断を取り上げ、松阪市の高齢者や病気等に関するデータや健康づくりにおける重点目標を押さえて、看護課題や地域医療にも結びつけながら、グループワークを通じて対話的に学びを深めていった。

9/28 三重県下緊急事態宣言による在宅学習期間のため課題対応

課題：松阪市の高齢化推移や病気に関するデータの読み取り

※高校教員によるオンライン授業サポートあり

10/19 地域住民の健康を増進保持するために必要なこと（グループワーク）

### 教育学

教育心理学の視点から人の記憶や学習動機付けに関する講義・演習を行い、生徒からは「覚えるためのコツがわかった」、「今後の勉強に役立てたい」など好評の分野であった。その習得の学びから活用する学びへと深化させるために、令和元年度からは学ぶための4つのポイントを盛り込んで「中学1年生に地域学習をどのように展開するか」という作成型の授業展開とした。

11/2 良い学習に大切な4つのポイントについて（ジグソー学習）

11/16 地域学習の授業展開について（グループワーク）

以上のように、従来から地域に軸を置いた分野もあったが、令和元年度が大きな転機となっている。この年は文部科学省事業の1年次にあたり、前年度に地域を学び場として生徒を育成する本校の教育活動の意図を大学教員へ伝え、すべての分野でより地域と関連させる内容への変更を依頼していた。すでに平成30年度から地域を視点に考える学びを高校教員側は試行的に導入しつつあったが、これを境に高大連携授業は各専門分野から地域を考える内容となったのである。

そして生徒に対しては、この授業は地域を軸にした学びであることを日頃から語りかけていった。大学教員の講義前後に高校教員が受け持つ授業においても、地域を軸にして考えられる内容を展開していった。そのことで地域という軸を視点として持つことができた生徒たちは、分野が変わっても年間を通して道筋を持って授業に取り組むことができた。ある生徒は行政学で学んだ農業の視点と経済学で地方創生をしている農業の視点とが繋がったようで、「行政学でやった内容やデータが経済学でも出てきますが、結局一緒のことなんですね。分野が違っても関連性が出てくることがわか

りました」と感想に書いてくれた。この関連性は至極当たり前のことではあるが、生徒からすれば意外と感動的なものなのではなかろうか。筆者がいわゆる進学校において、世界史の授業で孔子を教えていたとき、「これは古典で出てきた『論語』の人と別ですか」と質問されたことがある。当時はなぜこのような質問が出るのか分からなかったが、「世界史の孔子」と「古典の孔子」のように科目ごとの学びと捉えてしまい、そういった分断が起こったのだろう。教科横断型の授業展開があればそのような悲惨な末路にはならないのだろうが、だからこそ学びの繋がりが自然と起こるように軸を通すことが必要だと考える。

## （２）生徒活動の大きな変化

このように地域を軸としたことで、生徒にも大きな活動の変化がみられた。これまで生徒の主体的な活動は校外では見られなかったが、松阪市が主催する「駅西ワークショップ」に受講生２名が参加することになった（注１２）。

このワークショップは、松阪市中心市街地のまちづくりに興味のある人が年齢を問わず参加し、複合施設の活用法について議論を深めていくものである。生徒は「今まで教授の講義を聞いてきたけれど、ここでは市民の本音が聞けるのと、色んな年代の方がいるのでその方々のお話を聞いて、なにか今後に繋がることがあればと思った」と参加動機を語っている。実際、「たくさんの人の意見を聞くことは大事で、みんなそれぞれ違う立場なので見方等も違って、違う視点から意見を言ってもらえたのでそういう考えもあるんだと気づくことができた」と振り返っており、その気づきを得られてからは、周囲に相談をよくするようになったという。この生徒は異年齢との交流を通してさらに意欲を高め、年度末の研究発表会で「なぜ駅西の開発がうまくいかないのか」について課題や解決策をまとめた。

またもう一人は、「駅西ワークショップ」で価値観の異なる交流を経験したことで、より多くの人と意見交流をしたいと三重県教育委員会主催の高校生地域創造サミットにも参加していった。ここで県内外の高校生と意見交流を深めて地域活性化を考えていき、授業を振り返ることで問題意識が高まって、研究発表会では「なぜ若者が流出していくのか」をテーマに発表をすることとなった。この生徒は実際に流出の原因が何なのか校内全生徒にアンケートを取り、「若者が地方から減少する理由の一つとして、仕事に関する情報を得る手段が少なく将来が不安になり、都会へ行けば大丈夫という考えに陥り、飯南・飯高地域にある仕事にまで目が向けられていないのではないか」という結論に至った。

これらの生徒は授業で学んだ内容に興味・関心を持ち、もっと知りたいという意欲が高まって教員が紹介したイベントに進んで参加した。ここで注目すべきは校外に出てまで学びを広げようとしたことや、これまで異種であった人々との交流を通してよ



り成長が促されたことである。実はこのことは本校において近年多数出てきた事象であり、他に本校主催の答志島サスティナブルキャンプや山形県立小国高等学校主催の小規模校サミットなどにも積極的に参加する生徒が登場している（注13）。

このように、これまで学んできた専門分野の講義内容が実際そうなのか見聞き交流する生徒が出てきたことは、社会科学入門が学びのベースとして機能し、地域が学びの場として存在していることを裏付けている。また他地域の生徒との交流は自然と飯南・飯高地域を見つめ直すことにも繋がり、「比較する」や「関連付ける」といった考えるための技法を活用・習得する好素材となっている。さらに近年の本校生徒の様子から、校外との交流は自走した生徒が登場する契機にも繋がっている（注14）。

### （3）他教科との接続

生徒の学びを高めていくためには、1科目で個別的に進めるより他教科・他科目と教科横断的に取組を行うとより効果が高まると考えられる。例えば田村学氏が述べるように、校内でカリキュラム・デザインをしていくことも必要だろう（注15）。社会科学入門では特に行政学や経済学などの講義を受ける上で、基礎知識を持っているかどうかは大きなアドバンテージとなる。本校では1年次で現代社会（令和4年度からは公共）が必修、2年次に政治経済が選択履修となるため、そこで学んだ知識を復習・活用しながらより多層的に物事を深め、さらに専門的な学問へと繋げられるように設計されている。また、地理の授業で飯南・飯高地域と他地域とを比較したり、英語の授業で地域紹介を英語で考えたりと、他教科でも地域データを素材として扱いながら「地域を軸」とすることで内容が重層化してきている。

また本校では「産業社会と人間」を1年次に2単位設置し、地域を学び場として学習を深めている。産業社会と人間とは、「現実の産業社会やその中での自己の在り方生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度の育成を図る」ことを目標とする科目である（注16）。このため本校では近年、地域へのフィールドワークを実施して地域社会を知り、その地域で生きる本気の大人たちの生き様に触れながら自己の在り方生き方を深く考え、自分らしくたくましく社会で生きることを考えることを目的に活動している。この産業社会と人間は本校の学びの柱の一つとして位置付けているが、ここでの地域へ飛び出した活動やその体験が社会科学入門での学びを近年深めるものになっている。

この授業でのフィールドワークを通して地域の魅力を知り、本気の大人たちと繋がることができた生徒たちの考えは、近年の課題レポートから自分ごととして捉えられている様子が伝わってくる。「一見不便な点が目立つことが多いが、美しい景色や村落ならではの地域のつながりがある」、「地域の人同士の関わりが深い」、「高校生が行動し、地域の良さを発信しないといけない」といった記述があり、これまで単に

専門分野の学びを深めただけでは得られなかった自分ごとに関わる意識変化がある。このような関心や問題提起を持ちながら、2年次の社会科学入門で各専門分野からの視点を導入していくのである。

#### （４）「課題解決」という言葉の持つ影響

他教科・他科目の内容とも連動させながら、学びの軸を地域へ置いたことで、各大学教員の専門分野の学びはより深まりをみせた。すると、各専門分野を繋げる軸をしっかりと生徒にもたせるために、その講義前後にある高校教員担当の授業が重要な位置を占めてくるようになってきた。ただ、生徒の意識を高めようとするあまり、授業内容を試行錯誤する過程でかえって想いとは裏腹に、生徒の意欲を減退させるような活動も起こってしまった。それは、地域を軸に社会科学入門の内容を再構成していった際、「地域課題」を意識しすぎた部分である。

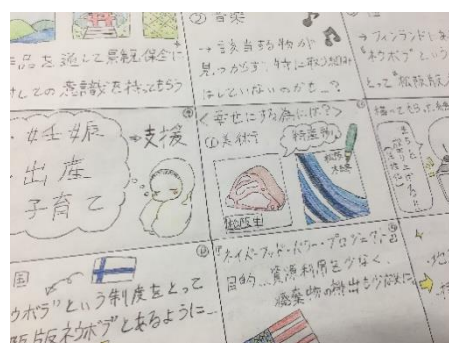
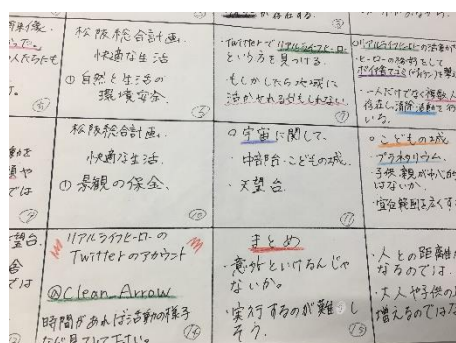
平成29年度は行政学の授業を承けて、地域の明るい将来を考える目的で「まっさか市議会だより みてんか」を教材として松阪市の現状を把握し、市・個人で何ができるのかを夏休みの課題とした（注17）。平成30年度も引き続いて、今地域では何が課題なのかを考える課題を出していった。「市議会だより」は市議会で審議されている最新の地域課題が網羅されているため、これを見ればトピックスは一目瞭然であり、解決していく題材を探すには最適だと考えていた。生徒からは「一度自分に何ができるか真剣に考えてみると視野が広がる」といった活動に対する肯定意見がある一方で、「現状調べてこんなに深刻になっているとは知りませんでした」や「課題を解決するにはいろんな対策が必要だ」とマイナスの印象で終わってしまうものが多く、明るい未来を考えるという視点で取り組む様子はあまりみられなかった。

当初この授業や産業社会と人間では、地域課題解決型キャリア教育を進める中で「地域課題解決」をコンセプトとして行ってきた。これは、本校が所在する地域が「世界の課題最先端の地」として認識していたからであって、その解決の過程で生徒の成長が促進され、かつ地域を活性化するものになると信じていたからであった。しかし、このことは生徒に対して「課題は解決するもの」であり、「解決しなければならないもの」と植え付ける結果となってしまう、「これまで地域活動をしてきたが、そもそもこの活動で何か解決できるのかわからない」といった声も出てきた。課題解決という文字に大きく影響を受けてしまい、地域をより良くするという意欲や動機付けが失われて“地域疲れ”ともとれる現象に陥ってしまったのである。この部分は実際に授業計画を立てて取り組んでわかってきたことであり、もっと別の視点からのアプローチにより授業を設計する必要が出てきたのである。

#### （５）自分軸と地域との繋がりを考える

地域を軸とした学びに「課題解決」という側面が重くのしかかって学ぶ意欲が減少してしまうと、そもそもの高大連携で学んでいく意味も失われていく。このため、「課題解決」ではないアプローチをする必要があった。そのため、より良くする、あるものを伸ばすといった発想の転換や、自分の興味・関心と関連付けるといった内容を取り入れることとした。ここでは、後者の事例について示していきたい。

夏休みの長期休業期間はどうしても生徒の意欲や関心がリセットされてしまう時期となるため、令和元年度から「自分が興味のあることと地域との関わり」を考える課題を出した。自分の興味のあることが地域と関連付けられたら面白いのでは、と自分軸で考えることのできる内容とした。この課題を考える上ではコンセプトマップを作成して思考を可視化し、松阪市の政策と関連するかについても調べて文章にまとめていった。そしてこの課題のポイントとして、興味のあることで生活を豊かにしたり人の幸せに繋がるのか考えたりと、プラスの発想を持たせられるようにした。夏休み明けには考えた内容をA4一枚の16分割メモ（写真参照）にしてまとめ、生徒同士で意見交換ができる場を持った。



生徒の興味関心は異なるため、当然10人いれば10通りの考えが生まれてくる。この意見交換では生徒相互にも刺激があり、「興味のある内容は似ていたけど、自分と違う角度で調べていたので参考になった」という感想があった。また、「私が考えていることは松阪市の政策にはない」という悲壮感を漂わせる生徒も出てくるが、その場合は逆に今後新しいことを打ち出していくチャンスだと声かけをしていった。

この活動では、生徒それぞれ自分が興味のあることを見つめ直す機会になり、自分を中心において地域を考えることにも繋がった。そして、今後の自己の進路と繋がられないかと考える生徒も出てきた。事実、ここで取り上げたテーマを志望理由として大学進学を果たした生徒も登場した。「課題解決」という視点ではなく自分の興味・関心と地域とを関連付ける進め方は、生徒のより良い形での発想へと繋がった。そして自分軸と地域との繋がりを深めていくと、自己の在り方生き方にまで迫るものになっていく。次項では学年末の研究発表会での内容を紹介し、高校教員が「課題解決」という視点を打ち出さずに生徒がどのように活動を行ったのか、また授業後にどのような影響があったのかについて紹介する。

#### 4. 研究発表会にみる生徒活動の変化といいなんゼミへの接続

##### (1) タイトルからみる学びの変化

社会科学入門では、2月授業最終日に4時限分を割いて研究発表会を実施している。内容は原則講義を受けた専門分野に関連するものとし、例年12月の期末考査終了以降の授業時間10～14時間程度を活動時間として充てている。そしてこの時間内で、発表要旨の作成や発表練習も行うタイトな日程となっている。筆者が担当した6年間（令和3年度分は12月現在未実施）の地域に関するテーマ数とそのタイトルは以下のようなものである。

**平成 27 年度** 受講生徒数 18 名、うち地域 4

松阪市の行政課題（行）、住民協議会との連携（行）

障がい者福祉対策について（行）、産業振興のための企業誘致（経）

**平成 28 年度** 受講生徒数 16 名、うち地域 3

交通安全（行）、松阪市の災害対策（行）、松阪市の産業・観光について（行）

**平成 29 年度** 受講生徒数 14 名、うち地域 2

松阪市の災害対策（行）、空き家とビジネス（経）

**平成 30 年度** 受講生徒数 16 名、うち地域 7

飯高・飯南のこれから（行）、松阪市とSDGs（行）

若者流出を防ぐために～高校生サミットで学んだこと～（行）

駅西ワークショップ～なぜ開発は上手くいかないのか～（行）

保育士で松阪市の町おこし（行）、スマホで地元を活性化！（経）

災害医療について～他県と比較して～（看）

**令和元年度** 受講生徒数 16 名、うち地域 5

ネット配信で地域の活性化（行）、地域活性化～移住について～（行）

アニメで地域を盛り上げるには（経）、松坂城跡（経）

お茶、飲んでますか？（教）

**令和 2 年度** 受講生徒数 15 名、うち地域 9

空き家で天体観測（行）、スポーツの未来（行）

松阪市インバウンド観光化計画（行）、保育士×木綿（行）

田舎で美容師が稼ぐには（経）、A hometown tax and area（経）

カフェ×経済（経）、松阪の地域通貨（経）、深野和紙と教育（教）

地域に関するテーマ数は減少傾向にあったが、平成30年度を境として多くの生徒が取り上げる内容となっている。減少していた頃はちょうど高校教員側から、「課題解決」の側面を強く押し出した時期と重なっている。平成30年度も同様に地域課題を押し出してはいたが、前年から急増したのはなぜだろうか。

この年は、社会科学入門において地域を軸とした高大連携授業を試行し始め、校外に自ら飛び出していった生徒が登場した年にあたる。そして、「授業で学んだことについて松阪市長と対話をしたいので、授業に呼んでください」と生徒から提案があり、急遽年間計画を変更して市長を招聘した年でもある。この時生徒は、講義内容で疑問に感じた部分について意見をぶつけ、講義内容や発表タイトルが地域と繋がり自分ごとになってきていた。そのことを受けて、高校教員の声かけの方法も、地域課題を解決するというよりも「地域をより良くするにはどうすればいいのか」と投げかけるようになった。そのためタイトルを比較しても、平成 29 年度までと平成 30 年度以降とは大きくニュアンスが異なったものになっている。また、これまでの年度では講義内容を少し広げた調べ学習で終わっていたものが多かったが、平成 30 年度以降の発表内容は自分が体験したものや提案が含まれるものが多くなってきた。先述したように、令和元年度から講義内容がより身近なものになり、フィールドワーク体験や地域の大人との対話等もしながら自分ごととなってくると、それが地域とも重なり合った発表内容に繋がっていったと考えられる。

そしてタイトルをみていくと、平成 30 年度以降は自分の将来や関心事に繋がるものや異種の内容を掛け合わせたものが登場してくる。美容師になることを将来の夢とし、経済学でビジネスモデルについて興味を持った生徒は、都会で働きたいという気持ちがありつつも、田舎で仕事をして食べていけるのかデータをもとに考えた。行政学で人口減少を学び、教育学で中学 1 年生対象の地域課題教材を考えた生徒は、もっと自分たちが興味のわくものがないかと想像して、映画『君の名は。』で経済効果があった岐阜県飛騨市を例にして聖地巡礼について深めていった。また「空き家で天体観測」や「保育士×木綿」は、別の 2 つのものを掛け合わせると意外な発想ができるのではないかと新たな価値創造を展開する生徒も登場した。

## （２）外部評価と生徒の成長

平成 18 年度以降は大学での研究発表会を行っていたが、連携先の大学が消滅すると校内での発表会へと移行した。この発表会には授業を担当した大学教員の他に、本校教職員にも参加してもらって講評を受けている。そして平成 30 年度からは県内総合学科校に勤務する教員へも呼びかけて参加範囲を拡大し、そのアンケートの中からもっとたくさんの方にも見てもらえないかという声が出てきた。ちょうどコロナ禍もあって、令和 2 年度からは県内外の関心のある教員にもオンライン公開という形をとって視聴者の幅を広げている。このことで、より様々な視点から講評をいただくことが可能となった。

生徒の発表について校外教員からは、「この授業を通して考えが深まり、研究が今後も進んでいく姿が見受けられた」や「自分の問題意識と繋がっているので関心も

てるものになっていた」という意見があった。単に授業で取り組んだからそのテーマで発表をしているのではなく、自分ごととして捉えた内容であることが伝わっていると読み取れる。また「原稿を持たず自分の言葉で話ができている」との声がいくつかあったが、この発表会では生徒全員に聴衆を見て自分の想いを伝えることとしている。そのため、生徒の振り返りからは「聞いてもらっている側に何を伝えたいのかを考えてプレゼンを構成できた」と、内容とともにそれを表現することができた達成感が多くみられた。一方で、「どうまとめたらいいかわからず調べる量が多くなって、どう話をもっていったらいいか戸惑った」という声もあり、興味関心のある部分を進めていく上で試行錯誤する様子も見受けられた。その中で、「テーマ設定をするのは苦労したが、アンケート集計をして自分なりに考えたことで、考える力や発表する力が身に付いた」や「調べるだけじゃなくて、実際に人から話を聞こうと行動できた」と自己の成長を実感する生徒アンケートが多数あった。

大学教員からは、「興味深いテーマが多くこちらが勉強になった」や「テーマに関して、『自分のこと』として問題意識を持っているものが多い」という意見があり、「地域を軸としたことでみなさんの関心に反映」した内容になっていたと講評を受けた。また「『安易に』調べたというよりは、実際に、面談や電話によるインタビューなどによる『事実』の収集が行われている」との評価も受けた。生徒が内容を自分ごととして位置付けられたことで、自ら行動した内容を踏まえた発表が増加してきた。これは学びの大きな成長であるし、これらの興味関心は社会科学入門の授業では収まることなく、総合的な探究の学びへと接続していくこととなった。

### （３）いいなんゼミへの接続

本校の総合的な探究の時間は「いいなんゼミ」という名称で親しまれ、本校の学びの集大成として位置付けられている。社会科学入門で地域を軸として置くことで、このいいなんゼミにおいて学びを深化させる動きが起こってきた。例えば今年度（令和３年度）は、小学校教員の夢を持っていた生徒が教育学で行った地域学習から授業計画に関心を持ち、実際に小学校へ行って授業見学やインタビューを行うことでより進路を明確にし、進路実現を果たした生徒が出ている。ここでは学びがより進んだ特筆すべき二例を紹介したい。

先述した「なぜ若者が流出していくのか」について発表した生徒Ａは、若者の減少は地域での仕事に関する情報が少ないからだと考え、「お仕事図鑑 IN 粥見」を作成していった。この図鑑のモデルは広島県立大崎海星高等学校の生徒が行ってきた実践で、高校生地域創造サミットで生徒交流を深めたことにより構想を得た（注 18）。最終的に地域の４企業へインタビューに向かい、地域の仕事や魅力をまとめていった。事前に進路指導室の資料で各企業を調査し、職場定着サポーターや大学教員にも

アドバイスを受けて質問の質を高め、後輩が読んでも伝わるように表現の工夫等を行っていった。この活動はいいなんゼミ発表会のポスターセッションにおいて紹介され、知らない企業に対して興味を持った後輩生徒が出た。この活動は自らの進路選択を見つめ直す契機にもなり、志望の就職先についての生徒Aは、「日常に目を向けることで、自分がやりたいことを見つけられると気づけた」と振り返った。

地元は田舎で何もないからはやく出て行きたいと考え、医療系の大学進学を目指した生徒Bは、少し関心を持っていた看護学を社会科学入門で大学教員から学んだものの、自分が本当に進むべき進路なのかどうか悩んでいた。実は行政学を学んだ際に、松阪市がどのような行政・サービスを提供しているのか、またそれを受けている地域の人にはどのような生活をしているのかと社会問題への興味がわきはじめていたからだった。そして生徒Bは、「飯高・飯南のこれから」というテーマで研究発表会において発表し、地元地域と他地域とを行政学や経済学の視点も踏まえて比較しながら地域の魅力に気付く、当たり前のように目を向けるようになっていった。この頃はまだ医療系の大学進学も悩んでいたが、答志島サステイナブルキャンプや小規模校サミットなど様々な体験や交流を行うことで地域を見つめ直した結果、地域には空き家がたくさんあることに着目するようになった。その後、高校生でも地域の役に立てることができないかと「空き家片付けプロジェクト」を企画し、松阪市役所や地域振興局など行政の支援を受けながら探究活動を進めていった。その結果、高校生自らの活動で空き家バンク登録の件数を増やすことに繋がり、その活動で得た実践力や新たな課題をもとに推薦入試で大学進学を果たした。

以上のように社会科学入門で学んできた内容はその授業内で終結することなく、さらに深化して探究活動にも繋がっていった。そして複数の専門分野を学んでいくことで、自らの進路を比較しながら考える契機ともなった。

## 5. 終わりに

本校が連携型中高一貫教育校、総合学科校へと改編した当初からあった「社会科学入門」の高大連携は、高校教員と大学教員との連携授業、そして地域を軸にした連携授業へと移行したことで、生徒の学びはより自分軸とも繋がったものへと深化していった。そして外部との交流によって探究的な要素にも繋がり、その後の探究活動や進路実現へも繋がることとなった。ただし高大連携授業は、大学教員の講義・演習を受講することのみをもって、生徒の学びが促進され成長が得られるものではない。日頃の高校教員の語りかけや他教科・他科目との有機的な接続があつてこそ学びが深まり、その学びで得た知識と高大連携授業での専門分野の視点、さらには自らの興味関心とが重なり合わさって主体的な探究活動へと繋がっていく。そのことを常に肝に銘じ、単なる出前授業にならないよう授業設計をする必要がある。しかし、ここ近年で

生徒の興味関心と専門分野とを接続させる要素を導入した過程で、大学の専門的な学術的要素が薄れていった傾向は否めない。そして興味関心に寄せた面白い発表は出てきた一方で、論理的に薄い内容になっていることも課題である。今後は授業設計をする中で、そのバランスについても考えていく必要はあろう。

今回は貴重な実践報告の機会を得て、本校の伝統ある社会科学入門の取組を見つめ直すことができた。本校の実践事例を中心に展開していったが故に、先行研究や他校の事例との関連性を反映するまでに論が及ばなかったことや、高大連携授業を中心に据えたことで探究活動へと発展していった細部まで紙面を割けなかったことは反省したい。ただ、今回の実践報告の過程でこの授業に熱い思いを持ったかつての担当者にもご意見いただくことができ、高大連携授業の在り方を再検討することにも繋がった。これまで社会科学入門に携わってきた大学教員・高校教員の皆様には、この場を持って感謝申し上げたい。当時とは内容が大きく変容してきたが、今回の実践報告も踏まえて様々な機会でご指導いただきたい。今後も高大連携授業を進め、高校・大学双方に意味があり、生徒の成長を促す学びを実践していきたい。

注1 例えば大正大学主催「高大接続フォーラム」（2021年9月18日）や大学コンソーシアム京都主催「高大連携教育フォーラム」（2021年12月4日）などが開催された。

注2 前掲注1のフォーラムやトモノカイ主催「冬の探究サミット 2021」（2021年12月18,19日）、マイプロジェクト事務局主催「online 探究勉強会」（月1回程度開催）など。

注3 当初から「環境の保護」、「農業と環境」、「国際社会と日本」、「社会福祉基礎」、「育児基礎」という科目において、四日市大学（環境情報学部）、三重大学（生物資源学部）、皇學館大学（文学部・現代日本社会学部・教育学部）との連携授業を展開してきた。ただし、その後の設定科目の廃止やコロナ禍によって、現在では連携授業の実施科目は減少している。

注4 例えば、総合学科の必修科目「産業社会と人間」との接続をはかるため、連携中学校には教科「人間と社会」を設置している。また、本校の中高連携の取組は、毎年『飯南地域 連携型中高一貫教育のまとめ』にまとめられており、令和3年3月発行分で第23号となる。

注5 本校の文部科学省事業に関する具体的な取組については、今回は紙面の都合により割愛する。詳細は文部科学省ホームページ（令和元年度 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/sesaku/1418873\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/sesaku/1418873_00001.htm)、令和2年度 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/sesaku/1418873\\_00009.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/sesaku/1418873_00009.htm)）を参照されたい。

注6 平成21年度からは、発展的科目として3年次に学校設定科目「社会科学発展」（2単位）が設置された。ここでは社会科学入門の学びを深化させ、論文作成にも力を入れてきた。ただし、生徒定員数の減少もあり不開講の年度が多く、教員数減少も重なり開設が困難



となって、令和4年度教育課程より廃止となる。

注7 「三重県立飯南高等学校と三重中京大学との間の連携授業に関する協定」（平成17年4月21日付）による。

注8 以降の平成19年度までの様子については、奥野誠人「高大連携授業の取り組み～「社会科学入門」の中で進路を切り開いた生徒たち～」（三重県高等学校総合学科教育研究協議会『研究紀要』1、2008年3月）に記載される内容や『飯南地域 連携型中高一貫教育のまとめ』の該当年度分による。

注9 村林守：『地方自治のしくみがわかる本』21,22 ページ（岩波書店、2016年2月）。

注10 本校の取組の背景や考え方については、土方清裕：「地域を学びの場とした探究活動で世界最先端のキャリア教育を！」（『季刊教育法』209、エイデル研究所、2021年6月）を参照されたい。

注11 この図は、大正大学主催「高大接続フォーラム」（2021年9月18日）にて筆者が実践報告した際に使用したプレゼンテーション資料による。

注12 駅西ワークショップの詳細は、松阪市ホームページ

（<https://www.city.matsusaka.mie.jp/site/toshikeikaku/list502-1541.html>）を参照されたい。

注13 山形県立小国高等学校主催による小規模校サミットについては、全国高等学校小規模校サミット実行委員会ホームページ（<http://www.ygt-oguni-h.ed.jp/summit/index.html>）を参照されたい。

注14 校外との繋がりに関する取組や自走する生徒については、『キャリアガイダンス』440（2021年12月）の本校の取組紹介部分（32,33 ページ）を参照されたい。

注15 田村学：『学習評価』（東洋館出版社、2021年5月）。

注16 文部省初等中等教育局長通知「総合学科について」（1993年3月）に記述される産業社会と人間の目標による。

注17 松阪市では、毎月広報とともに各世帯へ「まつさか市議会だより みてんか」が配布される。

注18 大崎海星高校の実践については、大崎海星高校魅力化プロジェクト編著『高校魅力化&島の仕事図鑑 地域とつくるこれからの教育』（学事出版、2020年8月）を参照されたい。